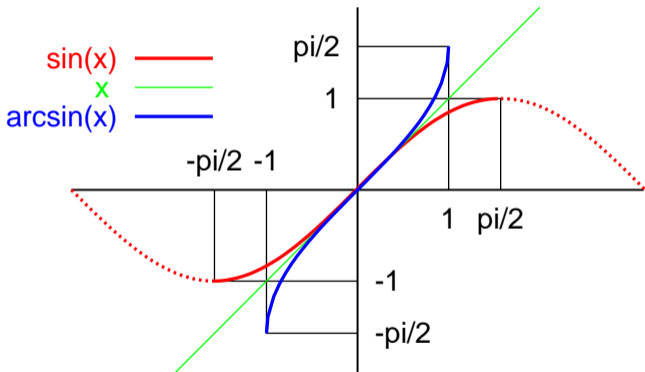


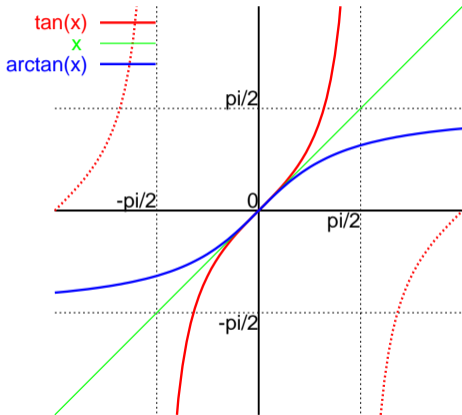
$y = \sin x$ の逆関数 $y = \arcsin x$



$y = \sin x$ の逆関数 $y = \arcsin x$

- 定義域： $-1 \leq x \leq 1$
- 値域： $-\frac{\pi}{2} \leq y \leq \frac{\pi}{2}$ (主値)
- 積分表示： $\arcsin x = \int_{t=0}^x \frac{dt}{\sqrt{1-t^2}}$
- $(\arcsin x)' = \frac{1}{\sqrt{1-x^2}}$

$y = \tan x$ の逆関数 $y = \arctan x$



$y = \tan x$ の逆関数 $y = \arctan x$

- 定義域：全実数 x
- 値域： $-\frac{\pi}{2} < y < \frac{\pi}{2}$ (主値)
- 積分表示： $\arctan x = \int_{t=0}^x \frac{dt}{1+t^2}$
- $(\arctan x)' = \frac{1}{1+x^2}$

三角関数を指数関数で表す

$$e^{ix} = \cos x + i \sin x$$

$$e^{-ix} = \cos x - i \sin x$$

↓

$$\cos x = \frac{e^{ix} + e^{-ix}}{2}$$

$$\sin x = \frac{e^{ix} - e^{-ix}}{2i}$$

$$\tan x = \frac{e^{ix} - e^{-ix}}{i(e^{ix} + e^{-ix})}$$

三角関数を指数関数で表す

$$\cos x = \frac{e^{ix} + e^{-ix}}{2}$$

$$\sin x = \frac{e^{ix} - e^{-ix}}{2i}$$

$$\tan x = \frac{e^{ix} - e^{-ix}}{i(e^{ix} + e^{-ix})}$$

これを使うと、

三角関数の諸性質は指数関数の性質に帰着 !!

加法定理 ← 指数法則

双曲線関数

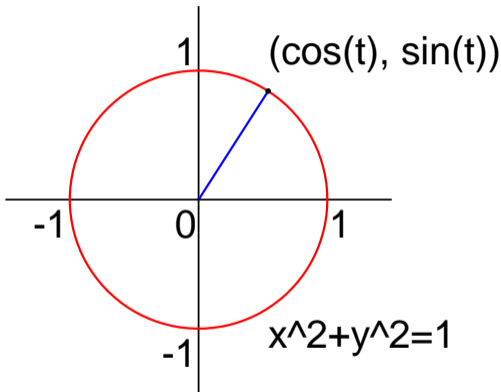
$$\cosh x = \frac{e^x + e^{-x}}{2}$$

$$\sinh x = \frac{e^x - e^{-x}}{2}$$

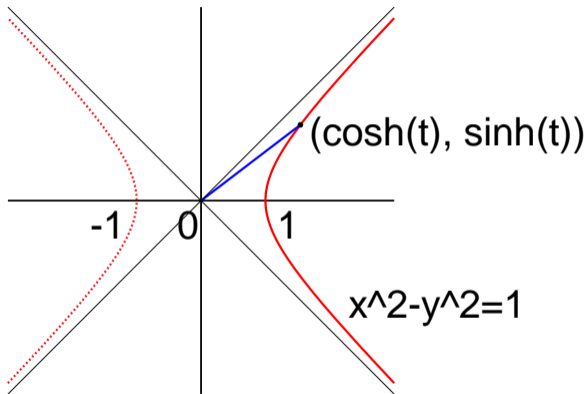
$$\tanh x = \frac{e^x - e^{-x}}{e^x + e^{-x}}$$

- 三角関数と類似の性質を持つ
- 自然現象の記述にも現れる

$x^2 + y^2 = 1$ の媒介変数表示 $(\cos t, \sin t)$



$x^2 - y^2 = 1$ の媒介変数表示 ($\cosh t, \sinh t$)



さて、話は変わって、

本講義後半の主題は、

積分

である

高校で習った積分

- 逆微分としての「原始関数」
 $f(x) = F'(x)$ となる F を求める
- 原始関数の区間両端での値の差としての
「定積分」 $\int_a^b f(x) dx = F(b) - F(a)$
- 定積分は実は「面積」を表す

積分・微分の発見

歴史的には、実は順番が逆で、
積分の起源の方が微分よりも遥かに早い

- 「積分」：面積を求める手法の探求
(エジプト・ギリシャ：2000年以上前)
- 「微分」：物体の運動の数学的探求
(Newton, Leibniz：17世紀)

それぞれ別のものとして発見されたものが
実は密接に関連していた !!
... 「**微分積分学の基本定理**」

積分法

- 統一的な求積法としての「定積分」
- 積分の上端を動かして、
積分値を上端の関数とみる

$$F(x) = \int_a^x f(t) dt : \text{「定積分関数」}$$

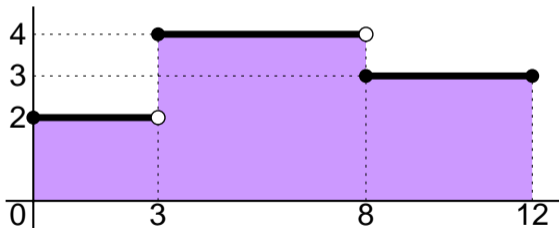
- 実は定積分関数を微分すると元の関数

$$\frac{d}{dx} \int_a^x f(t) dt = f(x)$$

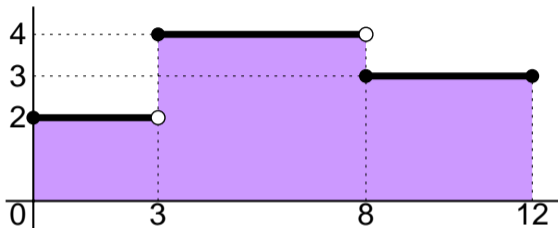
「微分積分学の基本定理」

積分の定式化

$$I = \int_0^{12} f(x) dx, \quad f(x) = \begin{cases} 2 & (0 \leq x < 3) \\ 4 & (3 \leq x < 8) \\ 3 & (8 \leq x \leq 12) \end{cases}$$



積分の定式化



$$\begin{aligned} I &= \int_0^{12} f(x) dx \\ &= 2 \times (3 - 0) + 4 \times (8 - 3) + 3 \times (12 - 8). \end{aligned}$$

「積分」は「積和」である

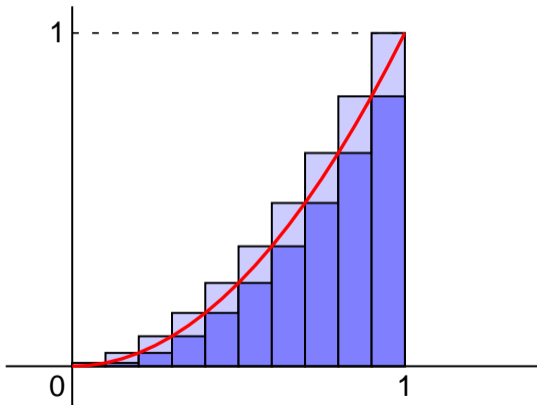
積分の定式化

では、

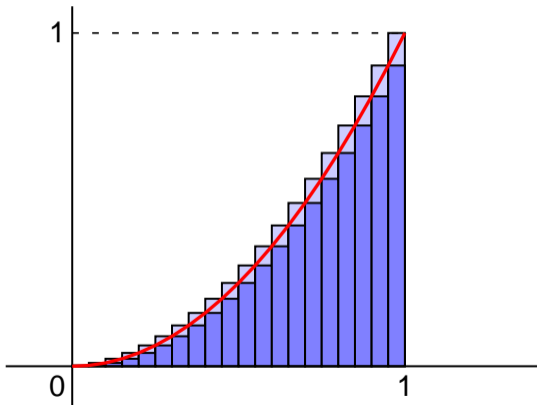
$$I = \int_0^1 f(x) dx, \quad f(x) = x^2$$

はどう考えるか？

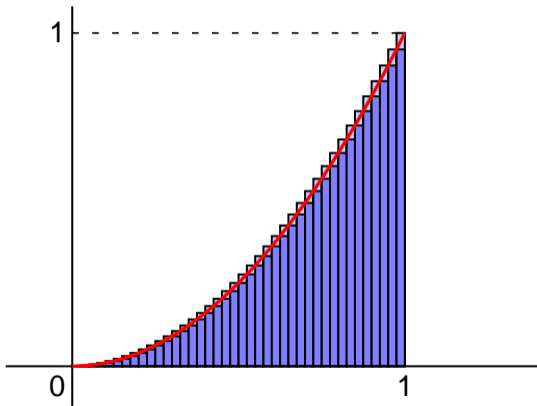
$$I = \int_0^1 f(x) dx, \quad f(x) = x^2$$



$$I = \int_0^1 f(x) dx, \quad f(x) = x^2$$



$$I = \int_0^1 f(x) dx, \quad f(x) = x^2$$



演習問題

$f(x) = x^2$ の $[0, a]$ での定積分

$$I = \int_0^a f(x) dx$$

を、

$[0, a]$ での $y = x^2$ のグラフの下の部分

$$\{(x, y) \in \mathbb{R}^2 \mid 0 \leq x \leq a, 0 \leq y \leq x^2\}$$

の面積として、

次の手順で上下から見積もることにより、

計算しよう。

$$I = \int_0^a f(x) dx$$

分割 $\Delta_n : 0 = x_0 < x_1 < \cdots < x_n = a$ を
 n 等分な分割 (即ち $x_i = \frac{ia}{n}$) とする。

(1) 各小区間 $I_i = [x_{i-1}, x_i]$ に対し、

- 区間幅 $|I_i| := x_i - x_{i-1}$

- I_i での $f(x)$ の下限

$$m_i := \inf_{x \in I_i} f(x) = \inf \{f(x) | x \in I_i\}$$

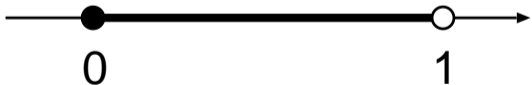
- I_i での $f(x)$ の上限

$$M_i := \sup_{x \in I_i} f(x) = \sup \{f(x) | x \in I_i\}$$

上限・下限について（再掲）

例：半開区間 $I = [0, 1) = \{x \mid 0 \leq x < 1\}$

I に最大値はないが、
どう見ても 1 が “最大値みたいな値” である



上限・下限について（再掲）

1 は最小の上界：

- 1 が上界である： $\forall x \in I : x \leq 1$
- 1 より少しでも小さくしたら上界でない：

$$\forall \varepsilon > 0 : \exists x \in I : x > 1 - \varepsilon$$

“どんな（小さな）正の数 ε についても
或る（うまい/まずい） $x \in I$ があって
 x が $1 - \varepsilon$ を超える”

このことを、

1 が I の**上限 (supremum)** である

と言い、 $\sup I = 1$ と書く

上限・下限について（再掲）

一般に、
実数全体の集合 \mathbb{R} の部分集合 $S \subset \mathbb{R}$ に対し、
実数 $a \in \mathbb{R}$ が次を満たす

（即ち、 a が S の最小の上界である）とき、
 a が S の**上限**であるといい、 $a = \sup S$ と書く：

- $\forall x \in S : x \leq a$
（即ち、 a が S の上界（の一つ）である）
- $\forall \varepsilon > 0 : \exists x \in S : x > a - \varepsilon$
（即ち、 a より少しでも小さくしたら
 S の上界でない）

(2) 面積の上下からの見積り

- $s_{\Delta_n} := \sum_{i=1}^n m_i |I_i|$
- $S_{\Delta_n} := \sum_{i=1}^n M_i |I_i|$

(3) $n \longrightarrow \infty$ の極限

- $s := \lim_{n \rightarrow \infty} s_{\Delta_n}$
- $S := \lim_{n \rightarrow \infty} S_{\Delta_n}$

任意の n に対して

$$s_{\Delta_n} \leq I \leq S_{\Delta_n}$$

であることから、

$$s \leq I \leq S$$

である。

ここで、 $s = S$ が成り立つなら、

$$s = S = I$$

となる !!

積分の定式化

どんなに細かく切っても、
その小区間内で定数になる訳ではないが、
上下から見積もることは出来るだろう

$$\text{(下からの見積)} \leq \text{(面積)} \leq \text{(上からの見積)}$$

もしあれば

細かく切れば、
上下からの見積もりが同じ値に近付くなら、
これを「面積（積分）」と呼んで良いだろう

積分の定式化

細かく切る方法は n 等分が簡単そうだが、
これだけを考えるのでは、話がうまく進まない

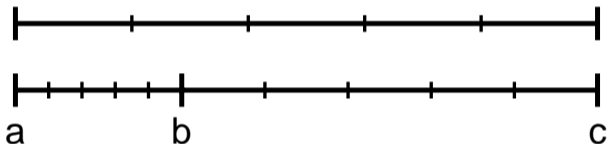
例えば、基本的な等式

$$\int_a^b f(x) dx + \int_b^c f(x) dx = \int_a^c f(x) dx$$

を示そうとすると...

積分の定式化

$$\int_a^b f(x) dx + \int_b^c f(x) dx = \int_a^c f(x) dx$$



n 等分点が食い違って比較し難い

→ 予め「全ての分割」を考慮に入れて定義せよ !!

余談 …… 現代数学の手法の特徴（の一つ）:

「苦勞を先に買っておく」

定式化の段階で先に苦勞をしておくと、
後で証明が楽になる

人間の都合でなく、
数学のものたちの気持ちに、
我々の気持ちを合わせる

その代わり、
人間には解り難くなることもあるけれど

では、少々苦勞はあるが、

「積分」の定義

をきちんとしましょう

積分の定義

仮定：

- 積分区間 $I = [a, b]$: 有界閉区間
- 被積分関数 $f : I$ で有界
即ち、

$$\exists m, M : \forall x \in I : m \leq f(x) \leq M$$

「積分」の定義の方針

- 区間を分割せよ
- 各区間で上下から見積もれ
- それを足し上げよ
- 以上を全ての分割について考えよ
- 上下からの見積が一致するか？

積分の定義

$\Delta : a = x_0 < x_1 < x_2 < \cdots < x_n = b$: 区間の分割

$I_i := [x_{i-1}, x_i]$: 各小区間 ($i = 1, \dots, n$)

$|I_i| := x_i - x_{i-1}$: 区間幅

$\delta(\Delta) := \max_i |I_i|$: 分割の最大幅

$m_i := \inf_{x \in I_i} f(x) = \inf \{f(x) \mid x \in I_i\}$

$M_i := \sup_{x \in I_i} f(x) = \sup \{f(x) \mid x \in I_i\}$

: 区間 I_i に於ける f の下限・上限

積分の定義

全ての分割 Δ を考えて、

下からの見積もりをどこまで上げられるか

$$\longrightarrow s := \sup_{\Delta} s_{\Delta} : \text{下積分}$$

上からの見積もりをどこまで下げられるか

$$\longrightarrow S := \inf_{\Delta} S_{\Delta} : \text{上積分}$$

$$s \leq \text{“面積”} \leq S$$

一般に $s \leq S$ であるが、 $s = S$ とは限らない !!

$s \leq S$ となる例

$$I = [0, 1], \quad f(x) = \begin{cases} 1 & (x : \text{有理数}) \\ 0 & (x : \text{無理数}) \end{cases}$$

任意の分割 Δ に対し、

$$s_{\Delta} = 0, \quad S_{\Delta} = 1$$

従って、

$$s = 0 \leq S = 1$$

積分の定義

$s = S$ のとき、これが“面積”と呼ぶべき唯一の値
この時、

f は I で**積分可能 (integrable)**

と言い、

この値を

$$\int_I f(x) dx \quad \left(\text{または} \int_a^b f(x) dx \right)$$

と書いて、

f の I に於ける**定積分 (definite integral)**

と呼ぶ

例：

$$I = [0, 1], \quad f(x) = \begin{cases} 1 & (x = \frac{1}{2}) \\ 0 & (\text{それ以外}) \end{cases}$$

任意の分割 Δ に対し、 $s_{\Delta} = 0$

一方、 $\forall \varepsilon > 0$ に対し、 $S_{\Delta} \leq \varepsilon$ なる分割 Δ が存在

従って、

$$s = S = 0 = \int_0^1 f(x) dx$$

